

## ■巻頭言

### 解放そして戦後 70 年によせて

李 省 展

(キリスト教文化研究所所長)

昨年の夏は記録的な暑さでした。それに誘発されるように東アジアの政治状況も暑さを増したように思えます。戦後 70 年を迎え、各国の過去に対する立ち位置の違いが鮮明になった夏でもありました。

何といっても世界的に注目を浴びたのは、安倍談話だったといえるでしょう。東アジアでも、植民地支配と侵略を認め謝罪した村山談話（1995 年）と、安倍談話との違いが改めて意識されました。村山談話は「植民地支配と侵略により多くの国々、とりわけアジアの国々人々に対して多大な損害と苦痛を与えた」と認め、「痛切な反省の意」と「心からのお詫びの気持ち」を表明しています。村山談話で初めて植民地支配への反省が明らかに示された意義は大きいと考えられます。

この村山談話が日本のキリスト教界に与えた影響もまた大きなものでした。韓国と日本の国交樹立という新時代を迎えて、鈴木正久牧師により出されたのが、日本キリスト教団の戦争責任告白（1967 年）です。この戦争責任告白はアジアの諸教会から歓迎されましたが、『世の光』『地の塩』である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした」とする告白には残念ながら、植民地支配に関する言及は皆無でした。キリスト教界で植民地支配に対する反省を真摯に表明したのが、日本聖公会です。戦後 50 年に出され

た日本聖公会の戦争責任宣言には「戦後 50 年を経た今、戦前、戦中に日本国家による植民地支配と侵略戦争を支持・黙認した責任を認め、その罪を告白します」と宣言されています。村山談話後に、この宣言が決議されていることに注目すると、政治がまさに民間をリードしたといえます。では安倍談話の植民地に関する言説はどのようなものだったのでしょうか。

安倍晋三首相は、韓国や中国からの牽制もあり、また協定国であるアメリカからも大きな圧力を受ける中で談話を練り直さなければなりません。実際、談話には間接引用が多く、その語り口や表情からも本心ではない部分を見出したのは私だけではないと思います。その中で植民地支配に関しては、19 世紀の西欧の植民地支配の潮流に対する危機感が日本の近代化の原動力となったこと、日露戦争がアジア、アフリカの人々を勇気づけたこと、第一次世界大戦後は植民地支配にブレーキがかかったこと、植民地支配からの永遠の決別が示されました。しかしそこには日本を主語とした植民地支配責任は見事に欠如しています。ましてや日露戦争が契機となり大韓帝国は植民地となってしまったことを考えると、日露戦争に対する称賛は大いに疑問です。戦争とは対照的に植民地支配に関しては、安倍首相は自説を通したともいえるのです。

村山富市元首相は、安倍談話は村山談話を継承していないと不快感を示しました。朴槿恵大統領は、残念な部分はあるがとしながらも政治的な判断で受け入れています。しかし、村山談話に比べると植民地支配に関しては明白に後退していると考えられます。村山元首相の「継承していない」という判断の一つ

恵泉女学園大学キリスト教文化研究所通信  
発刊準備号

には安倍談話の植民地支配責任欠如にもあ  
ったのではないかと私は思想像しています。  
(終)

■キリスト教文化研究所のあゆみ

◇準備委員会発足から開所式まで

キリスト教文化研究所設立準備委員会

委員 荒井英子、李省展、岩村太郎  
(事務) 杉山信義

第1回 2006年4月20日

第2回 2006年5月18日

第3回 2006年10月5日

○大学評議会 2006年10月15日

資料

- ・恵泉女学園大学キリスト教文化研究所設立趣意書
- ・恵泉女学園大学キリスト教文化研究所規程(案)  
2005年12月22日作成 2006年10月11日修正
- ・恵泉女学園大学キリスト教文化研究所運営規程(案)  
2005年12月22日
- ・キリスト教文化研究所設立にむけて 2006年10月5  
日  
研究プロジェクト案:宗教研究の方法論再考、「カルト」  
研究、「宗教被害学」試論 川島堅二
- ・オウム以後の日本の宗教学の動向 川島堅二
- ・キリスト教文化研究所(仮称)設立に関する教員懇談  
会 経緯について(2006年7月6日)作成 荒井英子
- ・キリスト教文化研究所(仮称)設立のための意見書  
(案)2004年6月14日
- ・キリスト教文化研究所(仮称)設置に向けて(2004年  
10月10日 文責荒井英子)
- ・2005年度第3回人間社会学部教授会 学長報告  
(2005年5月26日)
- ・2005年度第5回人間社会学部教授会 学長報告  
(2005年7月14日)キリスト教文化研究所設立検討委員  
会を組織し、設立準備委員会を設置すべきかどうかを判断す

る。検討委員会のメンバーは岩村太郎(委員長)、李省展(副  
委員長)、川島堅二、荒井英子とする。

・2005年度第12回人間社会学部教授会(2006年3月  
9日) 研究所に関する将来方針

・2005年度第12回人間社会学部教授会(定例)(2006  
年3月9日) 将来構想:キリスト教文化研究所を設置  
予定

キリスト教文化研究所発足準備委員会

委員 木村利人 荒井英子、李省展、岩村太  
郎 関本恵美子 宇野みどり

(事務) 杉山信義 野間良子

第1回 2006年11月1日

第2回 2006年11月15日

第3回 2007年1月10日

第4回 2007年1月30日

○開所式 2007年2月3日(土)

記念礼拝 司式 李省展 研究所長

記念講演会 『ユダの福音書』一原始キ  
リスト教におけるその位置付け― 講師  
荒井献(本学名誉教授)

◇2007～2010年度

キリスト教文化研究所企画運営委員

2007～08年度 李省展、荒井英子、川島堅  
二(事務) 杉山信義、野間良子

2009年度 李省展、荒井英子、岩村太郎(半  
期)、川島堅二(半期)(事務) 小関毅彦、杉  
山信義、野間良子

2010年度 李省展、荒井英子、川島堅二  
(事務) 小関毅彦、杉山信義、野間良子

公開講座

2007年度 春期 8講座 秋期 10講座  
オルガン公開講座海外研修(8/29～9/7)

2008年度 春期 10講座 秋期 11講座

2009年度 春期 12講座 秋期 14講座

2010年度 春期 12講座 秋期 14講座

#### 助成研究プロジェクト（代表者・テーマ）

2007年度（2件）荒井英子「熱河伝道とホロコースト」、川島堅二「宗教被害の調査研究」

2008年度（3件）池上英洋「イタリアの教会内部天井画の史料収集と整理」、川島堅二「宗教被害の調査研究（継続）」、関本恵美子「恵泉女学園の賛美集編纂にかかわる研究」

2009年度（2件）池上英洋「イエズス会派による天井画の撮影、調査と技法分析、岩村太郎「杉浦千畦とその時代」

2010年度（1件）村岡有香「初年次教育における『恵泉』への学びの充実に向けた研究—サラ・スミスと河井道—」

#### キリスト教史学会共催シンポジウム

2007年 「国家とキリスト教—その歴史的關係を今に問う」パネラー 高橋哲也（東京大学教授）、戒能信生（東駒形教会牧師）、斎藤小百合（本学准教授）（9月15日開催）

#### スプリングフェスティバル企画

2007年度 講演「J・Sバッハ〈マタイ受難曲〉に見る時と永遠の交錯」講師 杉山好

2008年度 映画上映会「白バラの祈り ソフィー・ショル、最期の日々」

2009年度 講演「宗教で読むアメリカの大統領—ブッシュの戦争からオバマの国民和解へ—」講師 栗林輝夫（関西学院大学教授）、コメンテーター 蓮見博昭

2010年度 講演「近・現代日本文学とキリスト教の出会い」講師 森田進

#### 恵泉祭（秋の）企画

2007年度 「エドワード・サイード OUT OF PLACE」映画会（11月11日開催）

2008年度 シンポジウム「朝鮮半島とキリスト教—南北キリスト教の現状と課題」尹慶老（漢城大学総長）、金興洙（牧園大学教授・韓国基督教歴史研究所所長）、徐正敏（延世大学教授・明治学院大学招聘教授）司会 李省展（研究所長）（10月17日開催）

2009年度 シンポジウム「救済と暴力—宗教の『救い』を問う—」パネリスト 藤田庄市（フォト・ジャーナリスト）、紀藤正樹（弁護士）、楠山泰道（日蓮宗僧侶・日本脱カルト協会代表理事）（10月10日開催）

2010年度 〈地域と大学を結ぶ市民公開シンポジウム〉いのちを生きるということ～架け橋としての園芸・音楽・対話の場～基調講演：斎藤道雄（清明学園校長）、樋野興夫（順天堂大学教授）

ハートフルコンサート「心をつなぐ恵泉の音」恵泉女学園大学聖歌隊・ハンドベルクワイア、指揮・伴奏 関本恵美子

パネルディスカッション：パネリスト 澤登早苗、小林ひかる、澤田みどり、高柳亮子、桃井和馬（11月23日開催）



2015 人権教育セミナーパンフレット  
表紙挿絵 人間環境学科3年檜崎唯

## ■書評

タラル・アサド著 (荻田真司訳)『自爆テロ』  
青土社、2008年

齋藤小百合  
(人間社会学部国際社会学科)

2015年はフランスの週刊新聞(シャルリ・エブド紙)襲撃事件に衝撃を受けているところへ、過激派組織「イスラム国」による邦人人質事件に暗澹たる思いとさせられ、11月にはさらにパリでの同時多発的な襲撃事件により、フランスは引き続き「非常事態宣言」となっている。「積極的平和主義」を掲げる安倍晋三政権は、一昨年以來、矢継ぎ早に安全保障法制の大転換に邁進し、去年9月には「安全保障関連法」を成立させた。さらに、これらの危機を「奇貨」として、憲法に「緊急事態条項」を盛り込む改正に意欲を見せつつ、日本が軍事的なオプションを選び取っていく道に決定的な一歩を踏み出そうとするかの様相である。インターネットを巧みに利用した「イスラム国」による脅迫や自爆攻撃、処刑などの映像は、まさに戦慄を覚え、否応なく危機感を煽られる。そうして、安倍政権が進みつつある方向に、確実に国民感情が引き寄せられつつあるようにも見える。それはひと言で言うならば、「イスラム国」による蛮行をイスラーム主義(者)一般の責任に拡散しつつ、イスラームへの憎悪を増幅する「イスラモフォビア」である。

ホモフォビアや「嫌韓・嫌中」もそうであるように、たいていの「フォビア」は対象に対する知識が乏しいことに起因する。全世界に16億人ともいわれる信徒がいるイスラーム教について、平均的な日本人はそれほど多

くの知識を得る機会がなかっただろう。すでに「9.11」以降、アメリカを中心に国際社会ではテロリズムとイスラームを安易に結びつける発想が定着してしまった。そこに、今回の事件と一連の報道である。イスラームへの嫌悪・敵視・偏見が何を生むだろうか。

本書『自爆テロ』は、2006年5月にカリフォルニア大学アーバイン校で行われた講演が土台になっている。著者タラル・アサドは、ロシア系ユダヤ人の父の波乱の生涯も合わせて、異文化のはざままで生きてきた「ディアスポラの知識人」たる経歴が非常に興味を惹かれるが、それはさておき本書である。本書の核心的な論点は、なぜ西欧のリベラル・デモクラシー社会において、これほどまでに、テロリズム(とりわけ自爆テロ)に戦慄するのか、という点である。アサドによれば、「テロ行為それ自体は非近代的で非リベラルな文化と不可分のものとして否定されるにもかかわらず、テロリズムはリベラルな主題の不可欠な主題」(16頁)でもあるという。つまり、ヒューマニズムを特徴とするリベラル社会の価値観においては、自爆テロの行為者が「一般市民を殺すために自らを犠牲にしたことが恐怖を呼び起こす」(65頁)のである。なぜか。戦慄は「アイデンティティの解体に対する本質的な反応」であり、西欧リベラリズムの言説は、自爆テロという理解しがたい現実に直面して、まさにアイデンティティが解体される危機に瀕するという恐怖の状態に陥り、正確に事態を把握できないままに、人間本来の可傷性を抑圧しつつ、<文明/非文明>の二項対立的思考で問題を対処しようとする欺瞞なのだ、というのである。

「近代リベラル・デモクラシーは、人間主義と世俗主義を公言している。そして、リベ

ラルたちは、近代ヨーロッパに大混乱を引き起こした宗教的な熱狂から距離をとっている。宗教的な残酷さに付随する中世的な感覚は、彼らに明らかに戦慄とみなされる。しかし、近代の人間主義的な感性の系譜学は、無慈悲さと共感を接続し、残忍な殺害行為が、この上ない悪であると同時に最高の善でありうると主張する。…近代性そのものにも不穏な矛盾があることは明らかではないだろうか。つまり、同情と残酷さとの間の矛盾と、それがリベラルな精神に戦慄を引き起こす力を持っていることは、西洋に特徴的なことなのではないだろうか」(126、130頁)。わたしたちはリベラル・デモクラシーの下に、理解することが困難な存在としてたち現れてくる他者に対して自分をさらし、二項対立的思考を乗り越えて粘り強く交渉することができるのだろうか。自らが他者に受苦を強いるような加害性を有していることへの感受性が欠落しているのではないか、という問いとともに、「戦後」70年を超え、日本国憲法公布から70年となるこの年を、「テロとの戦い」に回収されてしまわないよう、心に留めたい。(終)

#### 【ご案内】

2016年スプリングフェスティバル  
特別講演会

日時：2016年5月28日(土)  
10:30~12:00

会場：G101教室

講師：安積力也

(基督教独立学園高校前校長)

テーマ：今、親や教師に何が問われているのか—  
キリスト教学校現場からみえてくるもの

## ■エッセイ

### 東北初のライルオルガン

関本 恵美子

(大学オルガニスト)

2012年2月、日本キリスト教団仙台長町教会のオルガニストより一通のメールが届いた。同教会ではパイプオルガンの設置を検討しており、ライルオルガン製作所とコンタクトを取りたいとのことであった。2010年にオルガン見学のために訪問した日本キリスト教団清瀬みぎわ教会で、当時そちらのオルガニストであった本学の卒業生である豊田まりもさんより翠ヶ丘教会と私のことを紹介されたとのことで、卒業生を通じてこのような新たな出会いが与えられたことを心から嬉しく思ったのであった。また折しもメールを受け取った時、私はライルの工房のあるオランダのヘールデに滞在中であり、偶然とは思えず、これには何か秘められた計画があるのではないかと感じたのであった。

2008年に完成した翠ヶ丘教会のオルガン設置に際し、2006年よりそのオルガン設置のためのオルガン・アドヴァイザーを務めた。日本には現在1000台ほどのパイプオルガンが設置されているが、新しいオルガンの設置に始めから関わる経験は、オルガニストであってもなかなか経験できるものではない。幸いにも私にとっては、2002年に完成した本学チャペルのライルオルガン設置に携わった経験以来、2台目のオルガンであった。

本学のオルガン設置の際は、私にとって全てが初めての経験であり、オルガン・アドヴァイザーを担ってくださった東京藝術大学

名誉教授廣野嗣雄先生に頼りきりであった。しかし、廣野先生のお働きを傍らで拝見する中で、多くのことを学び、オルガン・アドヴァイザーとしての働きを一から教えていただく貴重な時となったのであった。

オルガン・アドヴァイザーの働きは、オルガン製作所との契約から始まり、工房での製作過程、解体したオルガンを積み込んだコンテナの輸入業務、日本の港から設置場所への運搬、設置場所での組み立てから整音、完成に至るまでを、オルガン製作所とオルガン注文者との間に立って、交渉、説明、アドヴァイス、通訳などを一手に引き受けるものであり、その働きは多岐に渡る。

オルガン・アドヴァイザーとして2台目、新しいオルガン設置に携わることでは3台目となった仙台長町教会のオルガンは、東日本大震災からまだ1年ほどしかたっていない時であり、礼拝堂の建て替えと同時進行で計画されたものであったため、様々な課題を抱えつつ歩み出した。オルガニストから初めて連絡をいただいてから契約に至るまでは5ヶ月と、比較的短期間で進んだのではあるが、最終的にライルオルガン製作所に製作を依頼することを教会が決議するまでには、大きな山を越える必要があった。しかし、東京在住のオルガニストのご家族が本学を訪れ、オルガンの音を録音されたものを教会の皆さんが聴き、その優しく包み込むような音に感動され、「私たちもこのような暖かなオルガンの音と共に賛美をしたい」との思いが一致したとのことであった。恵泉女学園大学のオルガンが、東北の地に新たな息吹を吹き込むためのきっかけとなったことに大きな喜びを感じたのであった。

ライルオルガン製作所は、1934年に現在

の社長であるハンス・ライル氏の祖父にあたるヨハン・ライル氏がオルガン・パーツ工房として始めた家族経営の製作所である。1960年にヨハン・ライル氏が突如天に召された後は、2人の息子たちが経営を引き継ぎ、歴史的オルガンの宝庫といわれるオランダにあって、現代のオルガンよりも300年、400年の歴史を歩んだオルガンの方が美しく歌う音を奏でるのはなぜなのだろうかとの疑問から発して、歴史的オルガンの修復に多数携わる働きを通して、「歌うオルガン」の研究をし続けている工房である。新しいオルガンの製作においては、歴史的オルガンの複製を創ることから始まったが、そこに留まることなく、伝統を取り入れつつも、それらの研究から得た知識をより発展させ、そのオルガンが置かれる場に最もふさわしい形、音色、音量などを考え抜いた上でそれらの研究の成果が活かしたオルガンが生み出されている。そのため、一台として同じオルガンは無い。日本のオルガン界では未だにライルオルガン製作所はバロックタイプのオルガンを製作する工房との認識が一般的であるが、既にそこから新たな歩みは進み始めており、常に発展し続け、他にはないライル独自のオルガンを製作しているのである。

ライルオルガン製作所の人々は、一台のオルガンを製作するにあたって、そのオルガンが設置される空間の広さや響きを知ることだけではなく、そのオルガンを奏でていく人々、また教会の場合、そのオルガンで賛美をしていく教会員の皆さんと実際に出会い、語り合うことによって、それらの人々と教会の雰囲気を感じ、この教会にとって最もふさわしい音がどのようなものかを熟慮し、パイプの一本、一本に、小さなパーツ一つにまで

深い愛情を込めて製作している。仙台長町教会では、新礼拝堂の建築中に仮会堂にて社長であるハンス・ライル氏と教会員有志との懇談会がもたれたが、会の始めは緊張した面持ちで出席されていた教会員が、ライル氏のフレンドリーなお人柄に心がほぐされたようで、会を閉じる頃には皆さんが優しい笑顔になっていたことが、非常に印象的であった。

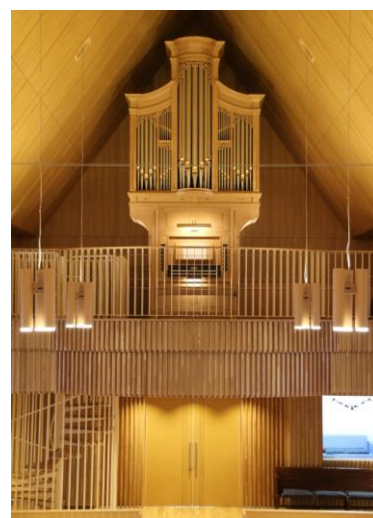
東日本大震災を経験した地にあって、仙台長町教会のオルガンの耐震対策については、ライルオルガン製作所のこれまでの日本での経験と新礼拝堂の設計会社、施工会社の知恵と知識を結集し、万全のものとした。ハンス・ライル氏も同席して2度の会議を重ね、お互いに信頼関係を深めたことが、その後のスムーズな流れに結びついたようだ。

オルガンは設置される建物の一部となる楽器であり、その空間の響きはオルガンにとって非常に重要である。仙台長町教会は、空席時 1.41 秒、満席時 1.19 秒と比較的短い残響の礼拝堂に設計されたため、オルガンの音がどのように響くのかと心配したが、卓越した技術と豊かな感性をもったライルオルガン製作所の整音師たちにより、これまで日本の残響の少ない教会で聴いたオルガンとは全く印象の異なる、暖かく包容力のある音が生み出された。それらは、10 日間という限られた期間に、整音師たちが最高の集中力をもって耳を研ぎ澄まし、一音一音がその空間で最も美しい響きを生み出す瞬間を逃さずに音創りをした賜物である。初めてこのオルガンの音を聴いた時には、心の中で凍りついていたものが全て溶け出すかのような感覚を味わい、暖かいぬくもりに包まれ、心の底から喜びを感じたのであった。

2014 年 11 月に完成した仙台長町教会の

ライルオルガンは、4 ヶ月後の 2015 年 3 月にオルガン奉献式が執り行われ、3 年に渡るオルガン・アドバイザーの働きが終了した。オルガン奉献式の中で、奉献演奏をするにあたってひとことご挨拶をしたが、語っているうちに、このオルガンは東北地方では初めてとなるライルオルガンであるが、それはまさに東日本大震災による大きな痛みをかかえた地にあって、今なお深い悲しみと希望の見いだせない日々を過ごす多くの人々の心に、暖かな光りを灯すために与えられたオルガンであると確信したのであった。そしてそのようなオルガンの誕生のために、私自身に与えられている賜物を生かすことができた恵みを深くかみしめた。

恵泉女学園大学にライルオルガンが設置されてから 13 年の時がたったが、オルガンが与えられる前には予想もしなかった様々な経験と働きが準備されており、一台のオルガンから尽きることのない興味と探求心、多くの出会いと学びを与えられている。これから先の新たな出会いとライルオルガンの更なる発展を楽しみにしつつ、研鑽を重ねていきたいと思っている。(終)



仙台長町教会パイプオルガン

恵泉女学園大学キリスト教文化研究所通信  
発刊準備号

■2015年度キリ文研主催公開講座、助成研究プロジェクト・講演・研究会等

公開講座

春期・秋期（連続）

マルコ福音書を読む（全10回） 講師 山口里子  
キリスト教と文学（全7回） 講師 柴崎 聡  
チャペルで弾くパイプオルガンXXI〈ビギナークラス〉（全17回） 講師 関本恵美子  
チャペルで弾くパイプオルガンXXI〈アドヴァンスドクラス〉（全16回） 講師 関本恵美子  
オルガンの魅力を探る〈J.S.バッハの森2〉XVI〈全14回〉 講師 関本 恵美子

2015年度助成研究（メンバー・テーマ）

共同プロジェクト 2件

李省展、木下隆雄、小檜山レイ、出岡学  
「楽道院（中国・山東省）における日本軍による欧米人強制収容所に関する基礎研究」（平文研）

Pamela L. Novick, Masako Tsuchiya

The Search for, and review of documents held by Bryn Mawr College and Smith College's YWCA collection to enhance the creation of the Data Base & Research Guide to the Records and Documents of Michi Mawai (1910-1953)

スプリングフェスティバル特別講演

講師：大西春樹（明治学院大学教授、キリスト教史学会理事長）

日時：5月30日 11:00~12:30

会場：恵泉女学園大学チャペル

テーマ：キリスト教主義大学の現状と課題

学内研究会

日時：2016年2月25日（木）

会場：G-101教室

テーマ：河井道資料の現在

報告者 Pamela L. Novick（人文学部教授）  
大町麻衣（学園史料室 室員）

開催協力

第26回全国キリスト教学校人権教育セミナー（会場校）

日時：2015年8月18（火）・19日（水）

テーマ：子どものいのちと人権—キリスト教学校の教育課題— 基調報告 李省展

開会礼拝 浜崎眞実 / 聖書研究 荒井献

戦後70年特別講演 講師 内海愛子

主催：全国キリスト教学校人権教育研究協議会、第26回全国キリスト教学校人権教育セミナー実行委員会

=====  
2015年度 恵泉女学園大学キリスト教文化研究所

（所長）李 省 展 人間社会学部教授

（所員）

斎藤 小百合 人間社会学部教授

Ken Fujioka 人文学部教授

関本恵美子 キリスト教文化研究所准教授

（事務）大沼美知子 研究機構事務室長

土屋 昌子 研究機構事務室

\*発刊準備号としてキリスト教文化研究所発足から2010年度までの資料を掲載しました。

2011年以降は次号に掲載予定です。

\*待望の発刊準備号をお届けします。ご意見ご感想をお寄せ下さい。

**キリスト教文化研究所通信発刊準備号**

発行日 2016年3月30日

発行 恵泉女学園大学キリスト教文化研究所

編集 恵泉女学園大学研究機構事務室

〒206-8596 多摩市南野 2-10-1

TEL 042-376-8332 Fax 042-376-8426

E-mail; [kenkyujo@keisen.ac.jp](mailto:kenkyujo@keisen.ac.jp)

URL; [www.keisen.ac.jp](http://www.keisen.ac.jp)